



<新任教員から> 新任教員としての1年

著者	近藤 巧
雑誌名	教職教育研究 : 教職教育研究センター紀要
号	24
ページ	77-79
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028405

新任教員としての1年

近 藤 巧

1. はじめに

私は今、公立中学校の英語科教員として働いています。中学生の頃に、就きたい職業の一つとして漠然と考えていましたが、教員を本当に目指し始めたのは高校生になってからでした。私の母校では放課後に教室を開放しており、自習をするスペースとして活用できるようになっていました。テスト期間になると私は友人と残って、空いている教室を使って勉強会をしていました。その時、自分が教えることで人が理解してくれる喜び、人の役に立てたんだという実感を得たことで教員を目指し始めました。その後、自分の目指す英語教員像に近づくためにはどの大学を目指すべきなのかを考え、関西学院大学を受験することを決め、入学させていただきました。大学生活では様々な分野を目指す友人や、志しを同じくする勉強会の仲間に出会い、切磋琢磨し、現在、大阪府豊能町立吉川中学校の英語科教員1年目として充実した毎日を過ごしております。

今では、授業や部活指導などに全力を注いでいます。毎日が充実していて、1日が過ぎるのが学生の時よりも早く感じる日々です。そんな私の1年について、次節から述べて生きたいと思います。

2. 学校生活について

(1) 学校について

吉川中学校は一般的な中学校と比べて小規模な学校です。1学年2クラス、または3クラスで、それに応じて教員の数もそこまで多くはありません。そのため、1人の先生が2学年の授業を掛け持つことが多く、私も1年生と2年生の英語を掛け持っています。先生方の年齢も20代後半から30代の方が多く、気軽に相談しやすい環境の中で毎日を過ごしています。そういった環境でいられるのは大変ありがたいことだと感じています。

この学校にきて、大事なと感じることはメモを取ることです。社会人として当たり前のことなのですが、メモをしなければ大事なことを見落としてしまったり、生徒との関係作りがうまくいなくなることもあります。例えば、先輩教員にプリントのチェックをしていただいた時、自分は指摘していただいた箇所をその場で覚えて

いるつもりでも、全て把握しきれていなかったり、生徒を再テストに呼び出していたけど、他の業務に追われて忘れてしまっていたりしました。「先生しっかりしてや。」といわれることも多くありました。今では常に手帳とペンを持ち歩き、手帳の表紙にポストイットを貼っておくことで、常にメモを取れるようにしています。学生のときから癖付けておけばよかったなと痛感しております。

(2) 生徒について

学校全体的に落ち着いた生徒が多く、私も生徒に助けられることも多いです。その仲でも、私は、中学2年生の副担任をしています。この学年では学年全体では「真面目」という言葉が一番に浮かんできます。私が授業をして驚いたことは、問題を解く時間、誰も喋らない事でした。教育実習で母校にお世話になった時も中学2年生を担当させてもらったのですが、課題を解く時間になれば、何もしない生徒、隣の人と喋り始める子など、教室全体に一体感も落ち着きもなかった印象でした。今の中学校の生徒達も一年生のときはもっと落ち着きがなく、騒がしかったのですが、今ではそのような様子は見る影もありません。しかしその反面、分からないところを放置して次に進む生徒や、逆に疑問に思ったことを自分で考える前に教員の助けを借りようとする生徒も多く見られます。グループ学習をするとき、活発に話し合いをする姿も見られるので、グループ学習の中で、教員の力を借りずに、自分達の力で課題を解決していけるようにする癖をつけさせる必要があるのだと感じました。また、休み時間やグループ内の話し合いでは積極的に喋るのですが、全体で意見を共有するときや、オープンクエスチョンへの意見を求めるときになると、間違うのを怖がったり、恥ずかしがったりして発言が消極的になってしまいます。自信を持たせる工夫や雰囲気作りにもっと力を入れていかないといけないと感じました。

(3) 行事について

本校では、学年を跨ぐ学校全体の行事として体育大会、合唱発表会があります。また学年ごとにも行事があり、2年生は宿泊学習、職場体験学習などがあります。私は学年分掌で職場体験係を担当させていただき、6月

から11月にかけて取り組みを進めていきました。職場体験学習を意識させるための道德の授業作り、お世話になる事業所への電話や職場体験通信の作成、学年会議での提案など、教科指導とは全く異なる仕事を経験しました。2人のベテランの先生方のサポートもあり、無事、職場体験学習を終えることができましたが、チームで一つの仕事をするときの難しさを痛感しました。自分の仕事ができていると同じ担当の先生方の仕事が進まない。そのため、取り組みの進行も悪くなる。当たり前のことですが、自覚が足りていなかったと感じました。仕事の優先順位をつける難しさや大切さを学んだ行事でした。今年の職場体験学習では、まず道德の授業を通して、生徒に職場体験学習でどのようなことをするのか、どういったことを心掛けないといけないのかを意識させました。その後、実際にお世話になる事業所に生徒だけで挨拶、事前打ち合わせをしに行かせることで、事業所への行き方、通勤にかかる時間、責任者の方への挨拶などをすませ、三日間の職場体験学習に臨みました。三日間の体験学習の後、生徒自身が体験学習を通じて感じたことや学んだことを画用紙にまとめて発表しました。生徒達のまとめを聞いて、生徒達にとってかけがえのない経験になったんだと実感するとともに、自分の知らなかった生徒の一面を知ることができて、よい行事になったなと思います。

3. 教科指導について

私は前節でも述べたように、1年生と2年生の英語を担当しています。また、どちらの学年も指導教諭の方とチームティーチングをしており、1年生では指導教諭がT1、2年生では私がT1として英語を教えています。また、本校では習熟度別授業を行っており、ゆっくりと基礎を固めたい人のための基本クラスと少し発展的な問題を扱いたい人のための標準クラスを1年生、2年生の両学年でクラス設定をしています。また、週4時間ある授業の内、1時間をALTとの授業の時間として設定し、その時間だけは分割をせず、合同で授業を行っています。

1年生の授業では、私は基本コースを担当しています。基本コースに所属している生徒達は英語が苦手な生徒ばかりです。そのため、私は授業で、身近な人を例文に出したり、ゲーム形式の文法導入をするなどして、生徒の興味・関心を引き出せるよう工夫するように心がけています。英語は苦手でも、元気があり反応もよく、必死に学ぼうとする姿勢がよく感じられる生徒達なので、こちらがそのように工夫すればするほど、生徒達が授業に入り込んでいることを感じられます。しかし、導入部分で盛り上がりすぎて、問題を解くときにその余韻から

周りとおしゃべりを始めたり、問題を解くことを放棄してしまう生徒が多く見られました。最初の頃は、パワーポイントを使って答え合わせをしていたため、自分がやってなくても大丈夫という意識が強かったのではないかと思います。私は生徒達に問題に取り組もうとする姿勢をまず身につけてほしかったため、答え合わせの時、黒板に答えを書かせるようにしました。そのような方法を取ってから、自分が黒板に書くんだという意識を持って、積極的に問題に取り組もうとする生徒が増えました。私はもう一歩踏み込んで、早く問題を解き終わった人がまだ終わっていない人に教えるという段階まで持ち上げることができたらいいなと思っています。

2年生の授業では標準コースを担当しています。このコースになると、塾に通っている生徒が大半で、教科書の内容把握だけだと満足できない、または授業時間が余りすぎてしまうことが多いです。そのため、このクラスの授業を考える時、学校以外（塾など）では決してできないことをなるべく授業に組み込むようにしました。例えばスピーキング活動を導入してみたり、難易度の少し高いアクティビティをやってみたり、ある単位では、英語のレシピを解説させて、実際に紙粘土や折り紙を使って飾り巻き寿司を作らせたりしました。このように、授業を考える上では、かなり自由度が高いです。その反面、本当にこの活動は意味があるのか、遊びで終わってしまわないかと悩むこともあり、活動の後のまとめ方に悩まされることも多々あります。ただがむしゃらに活動や授業内容を考えるのではなく、一つ一つの意味、狙い、目標を丁寧に吟味することの大切さをこの一年間、痛感してきました。

4. 部活指導について

私は今、女子バスケットボール部の主顧問をしています。練習のメニューを考えたり、練習の日程を決めたりと、今では慣れてきましたが、1学期の最初の頃は混乱ばかりしていました。今までサッカーしか経験してこなかったためルールも分からず、練習メニューを組み立てようにも何をしたいのかも分からない。また、6月には公式戦で審判をしなければならなかったのに審判の勉強もしなければなりませんでした。それでも生徒達は私に助言をもとめることもあり、そんな生徒の頑張る姿に、何も知らない、何もできない自分がどんどん情けなく感じるようになっていきました。教員になる前は楽しみにしていた部活指導もだんだん憂鬱になっていきました。今では生徒ともその頃のことを笑い話の一つとして話していますが、その当時、生徒から見ても私の表情は暗かったそうです。そんな私を心配してくださり、学年の先生方が勤務時間後に休憩室で悩み相談会を開いてく

ださりました。そこで今、自分が思っていること、不安に感じていることを受け止めてくださり、アドバイスまでしてくださりました。その中で、女子バスケットボール部の元顧問であった先生が「まず、生徒に聞いてみるのが一番。経験のないことは仕方のないことだし、そんなこと生徒も分かっていると思うよ。もしよかったら私が先生にバスケットボールを教えてあげるからね。」と言ってくくださり、すごく肩の荷が軽くなったことを今でも鮮明に覚えています。その後から、自分の中で、今は焦らずじっくりと、他の先生や、生徒達からいろんなことを学びながら少しずつ自分を変えていこうと思うようになりました。

3年生が引退し、2年生が5人、1年生が7人で活動をしています。2年生がしっかり者が多く、練習メニューや試合のメンバーを決めるときなどかなり頼りにしています。しかし、その2年生が引退した後、今の1年生が部活を盛り上げていく姿が私も副顧問の先生も想像することができず、不安を感じます。今後、女子バスケットボール部がどのようになっていくのか、想像はつきませんが、彼女らとともに日々新しいことにチャレンジしながら成長していきたいと思います。

5. 最後に

初任としての一年間を改めて振り返ると、本当にあっという間だったなと思います。それは、毎日が充実しているからなんだろうと思います。日々新しいことに会えることができ、飽きることもない毎日をこの一年間過ごし、本当に教員という職業を選んでよかったと思っています。

教職センターの方々のサポートや多くの先生方のご指導、勉強会のメンバーから受けた刺激、他分野を目指す友人から得た多様な視点、学校内外で様々な人に関わってもらったからこそ得ることができた経験、何か一つでも欠けていたら私は今、教員としての日々を過ごしていなかったと思います。これからも皆さんとのご縁を大切に、また、日々の学びを自分の糧にして、成長していきたいです。

(こんどう たくみ・大阪府豊能町立吉川中学校教諭)